

学生の名前を覚える

大塚 譲

私が学生の名前をできるだけ早めに完全に覚えるようにしている理由の一つは、かなり大きなクラスサイズ（1年必修クラス約40名！）の授業にコミュニケーション練習の要素を取り入れたいからである。私の勤務校は、確かに外語教育にかなり力を入れている。例えば、語種が多い（7言語をほぼ同一条件で学べる）。また英語以外の言語でもそれぞれの関連科目だけで最大36単位取得できる（交換留学と接合する3・4年のゼミを含めて選択科目が多い）。さらにはどの言語についても現地での夏季集中コースを紹介・仲介しその学習を単位化し、また提供している7言語の言語圏に協定大学を持ち専門的外語教育と接続する形での交換留学を実施している（ドイツ語圏の協定校はバイロイト大学、ウィーン経済大学、ベルリン経済大学の3大学。留学前には可能な限りÖSD（オーストリア・ドイツ語検定試験＝本学実施）でレベルチェックを行わせているが、その甲斐あってかバイロイト大学への留学者の中には締め括りにDSHの取得を目指しそれを果たす者が現れてきた。）等々、それなりに仕組みが整ってきたと言える。しかし大いに問題なのは、各言語Ⅰの必修クラスの40名という大きなクラスサイズと週2回という授業回数少なさ（以前は週3回だった）である。

この問題点を多少とも克服したい苦肉の策として学生の名前を早めに完全に覚える工夫をしている。やり方は学生たちの個人情報に盛り込まれた写真カードの作成である。新学期の最初の時間に趣旨を説明して一人一人の写真を一気に撮る。ドイツ語による簡単な自己紹介が出来た頃に現像した写真と写真カードを一人一人に渡す。カードは、表には日本語で、裏にはドイツ語で（記述式ないしは選択式で）自己紹介できるよう様式化しておく。遅くともゴールデンウィーク前後には全員の分が返却されるようにする。

いよいよ名前を覚える番である。しかし写真や個人情報のお陰で集中すれば20分もあれば1クラス分を覚えることができる。今年は新入生クラスを二つ（各40名）受け持っているが、それぞれ20分で済んだ。とは言えこれは記憶のメカニズムに逆行する長期記憶のでっち上げであるからと

でも忘れやすい。最初のうちは授業開始前にもカードの再点検に余念が無い。しかし教室ではこの記憶のメカニズムの逆行が現実からちょっとした逆襲を受ける。まず写真と実物の不一致である。写真ではメガネを掛けているのにその後コンタクトにしたとか髪型を変えたとか茶髪にしたとかオシャレを始めたとか、あるいは写真では大柄に見えるのに実際にはひどく小柄であるとか、逆にちんまり写っている男が実は大男であるとか、暗そうに写っている女性がめっぽう明るかったり、弾けるような笑顔で写っている者が実は声の小さな目立たない学生であったりする。それに名前そのものが記憶の妨げになることもある。博孝と孝博が並んで座り、日によって位置が逆になる。また一クラスに二人の雄介／悠介と二人の香織がいたり、二クラス合わせて3人の春香／悠香や洋介／陽介がいたり、さらには一クラスに雄介、雄平、雄樹、雄也、雄が（字は多少違ってても）揃っていることも珍しくはない。

しかし無理が通れば道理引っ込むの伝で2～3週間もすれば写真カードの威力は記憶のメカニズムを制圧する。学生たちがどこに移動しようと（不自由な座席指定制は採らない）すらすら名前呼びかけることができるようになる。効用は何と言っても個人的な親近感や信頼感が生じ、授業の雰囲気も和やかなものになることだ。だから指名やペア組み合わせなど授業中の指示も親しさとテンポの良さを同居させることができる。キャンパス内でもクラスのほとんどの学生と挨拶を交わすことにもなる。二つ目の効用は出欠を取る時間が不要になることだ。授業開始20分前にホワイトボードには出欠簿を貼り教卓上には当日使用の何枚かの教材を並べておけば、個々の学生に自分の出欠欄に丸を付け、ついでに教材を持って行かせることができる。授業開始のチャイムが鳴ったところで出欠簿を外し不在者に欠席の印を付けて速やかに授業を開始することができる。学生たちも私が学生の名前を覚える名人であることはよく承知していて不正は無い。遅刻者は終了後に申し出る。こうして出欠チェック（約10分）と教材配布（2～3分）の時間が節約されるから、年間では90分授業4回分を越える時間が確保されることになる。このように学生の名前を覚えると授業が楽しくなる上に時間も増やすことができ、一挙両得である。

（小樽商科大学教授）